

八月八日・九日に行われた東大見学会・企業大学訪問での体験を通して、私は自らの進路について深く考えることが出来た。この二日間は、先生方、企業先の方々、そして OB や OG の方々などたくさんの方々のご協力により、宮城県では経験することの難しいような貴重な体験をさせて頂き、非常に充実したものになったと思う。中でも、特にディレクトフォースと企業大学訪問の 2 つが印象に残っている。

①ディレクトフォース

東京に着いて最初の活動がディレクトフォース・笹川平和財団共催夏季プログラムだった。初めに、人身が立ち上げたベンチャー企業で義手を開発している近藤玄大さんからお話を伺い、その後に、グループセッションで 3 名の笹川平和財団の方々からお話を伺った。

はじめにお話を伺った近藤玄大さんは、ソニー・パナソニック卒のエンジニア 3 人だけで立ち上げたベンチャー企業で義手を開発しており、現在はソニーに戻り NPO 法人に移って義手の開発と普及を広めている。近藤玄大さん達が作る義手は、通常 150 万ほどの価格である義手を、3D プリンターとスマートフォンを応用することで 3 万円のコストで開発しているそうだ。高い技術を必要とする義手の費用を約 50 分の 1 にまで抑えたということに、私はとても驚いた。さらに、驚いたことに、近藤さんたちは「さまざまな人たちが社会で役立つための義手をつくるためには、こちらですべて決めてしまうよりも、土台だけ用意して、3D プリンターさえあれば世界中どこでも自分なりにカスタマイズしてつくれるようにしたほうがいいだろう。」という考えのもとに、義手の設計データを無料で公開している。これだけの素晴らしい技術なら、特許を取って大きな利益を上げることも可能なはずなのに、あえて特許を取らずにデータを公開するという姿勢をカッコいいと思った。

また、今までの義手は手がないことを隠すためのものとしての肌色の義手が主流であったが、近藤さんたちは隠すためのものではなく、個性として捉えあえて肌色にせず義手の機会部分を出したりと、ユニークな色やデザインに設計している。その前向きな考え方は、障害を持った人と一般の人の垣根をなくす要因の一つとなると思う。

近藤さんは私たちがこれから社会で活躍するにあたって心得ておくべきことも教えてくださった。それは、「手と足と頭を動かして、成功も失敗も経験する」「いろんな人、考え、価値観に触れる」「一緒に楽しく働けるか、喜んでくれるか」の 3 つである。これからの高校生活、大学生活、そして社会に出てからもこれらのことを心に留め、前向きに努力していきたい。もう一つ心に刺さった言葉がある。「やる前からのブレーキ、やれる前からのアクセルに意味はない」今の自分に思い当たることがあったからなのか、この言葉を聞いたとき、とても衝撃を受けた。今の自分から変わりたいと強く思った。

基調講演が終わるとグループセッションが始まり、矢ヶ崎さん、青木さん、樋口さんの4人の方々からそれぞれ貴重なお話を伺うことが出来た。

矢ヶ崎さんは、三菱信託銀行に入社した経歴を持っており、銀行の留学制度に応募し海外生活を約20間経験された方だった。MBAも修得しており、世界で幅広く活躍されている。私は、経済学に興味があり海外勤務も経験したいと思っていたので、グローバルビジネスの話や海外勤務の話詳しく聞くことができ良い経験となった。

青木さんは、私たち高校生が今やるべき事・考えておくべき事をたくさん話してくださいました。自分をよく知り五感をフル活用して物事を体験することや、常にWhy?と自問自答していくことの重要性、多くの失敗から学びを得て可能性を広げて行くことの大切さを改めて知った。

樋口さんは、法学部を卒業しており、海洋政策の研究、プロジェクトの担当をしている。法学部に入ったころは、弁護士を志望していたが、「今現在の法律の悪い点はある。それを使うのではなく批判する側に行きたい」と思い研究者になったそうだ。自分の考えをしっかりと持っていて、とてもかっこいいと思った。私は、法学部の人ほとんどが弁護士や裁判官の道に進むのだと思っていたが、同じ分野でも違った角度からの仕事のかかわり方があるのだなと思った。

世界を舞台に活躍されている方々のお話はどれも興味深く、心に響くものばかりだった。今の私は、部活動や、外部活動、勉強面においても、全てが中途半端で自分に自信がない状態なので、まずは今の高校生活の1つ1つを大切に、丁寧に生活をしていきたい。

②企業大学訪問

午後からは、企業大学訪問の活動だった。私たちのグループは経済系の分野に興味があったので、有限責任監査法人トーマツを訪問させていただいた。

有限責任法人監査トーマツは日本初の全国規模の監査法人として1968年に創立されて以来、合併、統合などを経て人員8000人、業務収入1400億円を超える日本で最大級の公認会計士事務所、いわゆる「4大監査法人」の一つである。今回の企業見学では公認会計士という職業の魅力ややりがい、主の仕事内容などを私たちに教えてくださった。実際に公認会計士として働いている方々の生の声を聴くことが出来ておもしろかった。私が公認会計士という職業を知ったのは、専門性が高く、女性も活躍できる職種の一つであると聞いたからだ。実際に、私たちを対応してくれた方々も皆さん女性だった。

訪問当日、八重洲オフィスに入ると受付の方々が温かく出迎えてくれ、担当の方のところへ案内してくださった。私たちを担当してくださった田中祥子さんは、事前のメールのやり取りでもやさしく丁寧に対応してくださった。大きな会議室に入ると、鶴田裕子さんと大源悠美子さんの2名の公認会計士の方々が待っていた。今回の企業訪問のために、私

たち向けの資料とスライドも用意してくださり、公認会計士の主な仕事内容と財務諸表(決算書)のことを授業形式で説明してくれた。

公認会計士は、会計に携わる資格の中で最高峰の資格で、会計のプロとして経済社会の健全な発展を支える役割を担っており、社会的地位や信頼性の高い職業だ。仕事内容は、大きく「監査」「税務」「コンサルティング」の3つに分けられる。

監査には、組織体内部で実施される監査役の監査や内部監査、組織から独立した外部の監査人によって実施される外部監査がある。監査業務は公認会計士だけに認められた独占業務で、企業等の決算書が正しく作成されているかなどについて独立した第三者の立場からチェックし、利害関係者に対して保証する役割を果たす。また、公認会計士は税理士登録さえすれば税理士になることができる。税務は、企業・個人の税務書類の作成や税務相談、M&A や国際税務など幅広い知識を活かして、指導やアドバイスを行う。コンサルティンは経営戦略の立案から、組織再編、情報システムの構築、企業再生計画の策定、株式公開に関するトータルサポートなど経営全般にわたる指導やアドバイスを行う。いずれの仕事も、社会の根幹を支える重要な役割を持っている。この他にもトーマツでは、金融関連業務、グローバルサービス、株式公開支援、IFRS 関連業務、パブリックセクター関連業務、アドバイザリーサービス、エンタープライズリスクサービスなど、幅広い分野で多角的な業務を手がけていることがわかった。

その後、実際にある仙台の様々な企業の財務諸表を元にこの財務諸表がどこの企業のものであるかを当てるゲームをした。与えられた数値や、売られている品物の情報、売り上げなどを見て企業名を当てるのは難しかったがとても面白いものだった。

公認会計士の仕事内容や財務諸表の説明を終えると、質疑応答へと移った。事前に送っておいた質問に答えてもらい、当日はそれらに付け足す形で質問していった。沢山の質問の中で私が一番興味を持ったのは「AI は監査業務にどのような影響を与えるか。AI によって公認会計士の職が失われる可能性はあるのか。」という質問に対する回答だった。私は、以前に今後数十年で取られてしまう職業で公認会計士を目にしたことがあった。人間の知能や直感に基づく判断や意志決定を代替し、より正確かつ高速に物事を進めて行くことが出来る AI を使えば、監査業務を始めとする公認会計士の職の効率は上がり、公認会計士という職がなくなってしまうと言う意見には一理あるのではないかと考えていた。しかし、鶴田さんと大源さんの意見は少し違った。確かに、AI を使えば不正も発見しやすくなり、仕事の効率も上がる。けれども、相対する経営者が人間である限り公認会計士という職がなくなってしまうことはないそうだ。信頼を得る為にはクライアントとのコミュニケーションが重要となる。そのコミュニケーションは AI ではなく人間がやるべきなのだ。人間だからこそ、理解し合える点や、納得してもらえる点があるはずだ。

今回の東京研修を通して、「公認会計士」と言う職業について以前より明確に知ることができた。また、公認会計士に対する憧れがさらに高まった。公認会計士は、自分が思っ

いる以上に責任が強く、難しい職業である。様々な勉強をし、多くの経験を積んで、さらにはグローバル化が進む現在、IT スキルや英語はもちろん、そのほかの国の言語も必要になってくるそうだ。まずは、今目の前にある高校生活の1つ1つを丁寧に、有意義なものにしていきたい。